

# みこころ

第11号

2008年  
12月24日

発行元：

カトリック城北橋教会 広報委員会

〒462-0847 名古屋市北区金城1-1-57

TEL(052)912-7123 FAX(052)935-2254

(HP)<http://johokubashi.mikokoro.net>

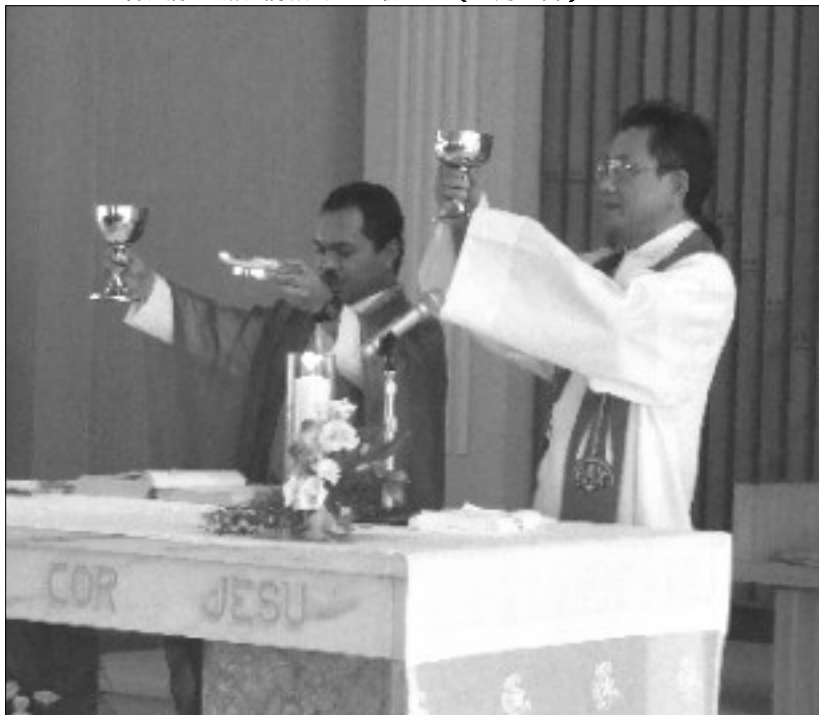


写真：城北橋教会堅信式（10月5日）

## INDEX

- 「今日あなたがたのために、救い主がお生まれになった」 プリヨ・スサント神父（p2）  
特集「188人のもとにひとつに…」～城北橋教会参加者による列福式レポート～（p4）  
日曜学校の子供たちと分かち合う「証人（あかしびと）」（p9）  
寄稿 高木やす子さん（p11）  
不思議発見シリーズ 第6回「イエス様のいない十字架」（p12）  
教会のこの人・はじめまして（p13）  
教会行事報告・信者動向・教会行事予定ほか（p14）

ヘルマス神父様の城北橋教会での初ミサ（9月7日）



# 「今日あなたがたのために 救い主がお生まれになった」

（ルカ2:11）

主任司祭 プリヨ・スサント神父

ルカによる福音書の中でイエスの誕生物語は、おそらく一番最後に書かれた部分だと思われる

る。全体の福音の素晴らしい叙唱のようなものだと思われる。そこに初代教会が聖霊に導かれ

てイエスの死と復活の信仰が歌われる。

ルカはその出来事はいつ、どこで起こるかという事実から語り始める。この出来事は、ローマ帝国にアウグスト皇帝が世界を支配する時、ユダヤ地方の小さな街ベツレヘムでの出来事だったとルカが語る。この出来事は作り話ではなく、歴史的な事実なのだ。ルカは伝えようとするのだ。神の子の誕生は、人の子、人間の子の誕生の出来事と同じなのだ。ルカが語ろうとする。もちろん、ベツレヘムはこの物語の中でキーワードとなっている。預言者たちは、来るべきメシアがダビデの子孫で、偉大な王であるダビデと同じくベツレヘムで生まれる（ミカ5:1）と。天使が言った言葉、「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった」は、イエスの王的存在を強調する。同じことが、皇帝になる人物の誕生の知らせに使われたよう

## 城北橋教会のクリスマス

今年も待降節に入り、教会はイエス様の降誕を告げ知らせる飾り付けが綺麗におこなわれました



コミュニティホールに飾られた聖家族  
聖家族を囲む家々がベツレヘムの街を感じます。



聖堂に飾られた馬小屋と聖家族  
馬小屋のまわりをポインセチアや草木で綺麗に飾りつけられています。

だ。だが、イエスと言う王様の誕生は最初から首をかしげる要因となった。光り輝く宮殿ではなく、馬小屋として使われる洞窟でお生まれになったこと、また大王の象徴としての力、富、権力、兵士、武器など何もなく、貧しい幼子だったこと。

羊飼いたちに告げられたこともそうだった。羊飼いたちが見かけようとすると幼子は、全く普通の人間の子とも、おまけに、貧しい人々の間の貧しい家庭に生まれた赤ん坊だった。

最初から救い主の誕生が神の「論理」を現わされている。人間が考える「平和を作るために戦争を用意せよ」と言う論理をひっくり返す論理を、降誕祭夜半ミサに読まれる福音は、命を救うために神が貧しさと弱さをお選びになり、また、力と権力に基づく人間の論理を捨てるように教えられる。

そうだ。誰にこの救い主の誕生が知らされるのか。羊飼いたちだった。なぜ？彼らが立派で、素直で、好意を引き寄せられる人たちだったのか。残念ながらそうではなかった。当時、彼らの評判と言えば、不忠実、汚く、

泥濁と等しく、社会の一番外れにいる人間だった。この人々のために、救い主が生まれた。「あなたがたのために救い主が生まれた」と羊飼いたちに天使が告げたのだ。生まれた時から救い主イエスが社会の一番外れにいる人々の間に見つけられることを選ばれたのだ。罪人、社会に排斥された人、社会に数えられない人の間に。

こうして、神の国の宣教活動の間にも、イエスはこのような人々を仲間とされることを選ばれた。最期まで、イエスは、このような人々が話すことばを、彼らが理解できるたとえ話を使い、彼らの喜びと悲しみと苦しみを分かち合い、彼らをご自分の仲間とされる。

人類の歴史は、二つの時代に分けられるであろう。キリストの前の時代とキリストの後の時代。キリストの到来は、人類の全く新しい時代の始まりである。神を信じる人、信じない人、すべての人は、キリストを無視することが出来ないであろう。誰しも、選択し自分の立場を明確にする必要がある。キリスト者のわたしたちはすでに決断をし、

立場を明確にしたはず。キリストを信じることを選択し、誇りを持ってそれを生きること。日本のペトロ岐部と一八七人の、いや何百人も、何千人もの殉教者たちのように……。

# ☆クリスマス イルミネーション☆



教会の門に立てられた馬小屋をイメージしたの看板  
看板のまわりを口ソクカップに見立てたイルミネーションが輝きます。

シュバリエ館に飾られたイルミネーション「恵みの風に帆をはって」  
帆に見立ててイメージしたイルミネーション。「列福された188人の殉教者を通して吹かれている聖霊の風を受けて、みんなで福音を宣べ伝えよう！」というメッセージを込めています。



~ 特 集 ~

「188人のもとにひとつに...」

~ 城北橋教会参加者による列福式レポート ~



二〇〇八年十一月二十四日。長崎県宮野球場（通称ビッグNスタジアム）において、日本初の列福式「ペトロ岐部と一八七殉教者列福式」が執り行われ、国内外から三万人もの信徒が集まり賑かに行われました。列福式には、教皇代理としてローマからジョゼ・サライバ・マルティンス枢機卿（前ローマ教皇庁列聖省長官）が列席し、教皇の書簡を読み上げ、ラテン語で「使徒的権威によって福者の列に加えます」と列福を宣言しました。当日は朝からあいにくの雨でしたが、式が始まる正午にはだんだん小降りになり、列福の儀のときには止み、日が差し参列者に感動を与えました。城北橋教会からも十名ほどの方が列福式に参加されました。その中から五人の方のレポートを書いて頂きましたので、紹介致します。

列福式に参列して

アウグスチノ  
清水 隆

正しく聖地巡礼、長崎出身の吉川義夫さんが同行してくれるという幸運に恵まれた二泊三日を記してみます。

初日、二十六聖人記念館、三人の少年の像を見てもう涙。聖母の騎士教会、聖コルベ神父記念館では、永井隆博士がコルベ神父を診察、重い肺病を告げると、「貴方は名医です。十年前、同じ診察を受けています」、驚く博士にロザリオを見せ、「これですよ」と笑ったたと書かれています。永井隆記念館にも立ち寄りしました。大浦天主堂は一八六四年、フランス人のために建立されたものですが、ここに隠れキリシタンが現れます。一六三九年、幕府の鎖国令、一六四四年のキリシタン禁教令から、約二五〇年後のことです。何と七世代に渡って信仰を守っていたことになりました。

「サンタマリア像はどこ？」司祭の驚きと感動はいかばかりだったでしょう。

この教会で列福式の前夜祭があり、委員長の溝部修高松司教は、長崎からヨーロッパに派遣された四人の少年使節にスポットを当て、話されました。日本の教会の将来は少年達であるの考えからと。船旅は行きに三年半、帰りは弾圧を考えて六年だった。その中の一人がジュリアン中浦神父で列福者です。「今、日本の教会は、各々の共同体の中から司祭の召命がなければならぬ。それは可能であると私は信じます」と話を結ばれました。

さて、列福式の日、朝から長崎は雨だった。式の前、時間があるので浦上天主堂を見る。丘の上に東洋一の天主堂がそびえていたが、頭上の原爆で壊滅、再建です。吉川さんも被爆者で、その体験を細々と聞きました。よく生き長らえたものです。平和公園は式場の近くで、大きな平和像も見ました。列福式は小雨の中で約四時間でした。赤と白の色彩の中、大勢の司祭団、聖歌隊の美しい演奏、列福宣言。

司式の白柳枢機卿は、「恐れずに進もう」と説教の最後に呼びかけられました。

三万人の聖体拝領は、キリストが何千人もの人々にパンを分け与えた聖書のようにでした。

三日目、吉川さんの故郷平戸で、ザビエルが一ヶ月滞在したという記念平戸教会へ。快晴で超絶景の海と平戸大橋が展望できる高台にザビエルも立ったことでした。

追悼と感動の旅から帰り、県図書館で二冊の本を借り読みました。遠藤周作の「沈黙」は、踏絵を踏んでも良い、転んでも良いのニユアンズでした。もう一冊は、大仏次郎の「天皇の世紀」です。これは幕末の頃を書いた歴史書で十巻になる膨大な量の作品で、その第九巻の中の「旅」という章でも一八〇頁に及びます。天主堂とマリア像に感激した隠れキリシタンは迫害も恐れず続々と現れ、約四千人という。しかし、維新後の新政府は禁教令を踏襲し、謀者によるスパイ活動、訴人への賞金などの結果、ほとんどが捕らえられ、土地も没収、遠島の「船旅」となり、送られた地で迫害によ

る「転び」や殉教が続いたので、切支丹禁制の高札が撤廃されたのは、明治六年（一八七三年）のことでした。大仏次郎の文を抜粋します。

「浦上切支丹の旅の話は、この辺で打ち切る。私がこの事件に長く拘り過ぎるかに見えたのは、進歩的な維新史家も意外にこの問題を取り上げないし、然し、実に三世紀の武家支配で、日本人が一般に歪められて卑屈な性格になっていった中に、浦上の農民がひとり『人間』の権威を自覚し、迫害に対しても決して妥協も譲歩も示さない、日本人としては全く珍しく抵抗を貫いた点であった。当時、武士にも町人にも、これまで強く自己を守って生き抜いた人間を発見するのは困難である。権利という理念はまだ人々にない。しかし、彼らの考え方は明らかに、その前身に当たるものであった」。

私は、最近レクイエムのみ歌う合唱団に入っています。優しく美しいこの曲を精いっぱい歌い、殉教された人々に捧げたいと思っています。

### 私たちに いま出来ること...

ヨハネ  
片岡 義博

列福式を終えて一週間が経とうとしています。まだあの時の感動と喜びの余韻につつまれています。

今回の「ペトロ岐部と一八七殉教者」列福式にあたっては、私もメンバーの一員である名古屋教区青少年委員会一年以上かけて準備をしてきました。昨年（二〇〇七年）の十一月には信仰の歴史を訪ねる旅として長崎巡礼を行い長崎の教会や、今回列福された金鐔次兵衛神父のゆかりの地などを訪れました。また今年の六月にはロウソクリレーミサといって、「証し灯」として十四教区もの青年たちのところにバトンしてまわったロウソクを囲み、私たちは殉教者について考え、ミサを捧げたりして列福式の準備をしてきました。

今回の列福式には、名古屋教

区青年巡礼団として二十名の青年たちが列福式に参加しました。往路は夜行バス、復路は新幹線という方法で、前日には二グループに分かれ、一グループは今回長崎教区の青年列福式準備会が企画した「わっかもんウォーク」という企画で雲仙教会から列福式会場までの五十八kmの徹夜巡礼に臨みました。（城北橋教会からは水口忠君も歩きました）

もう一つのグループは、雲仙教会を中心に島原半島の殉教者ゆかりの地を訪れたり、祈りの集いに参加するグループに別れ、それぞれのグループで想いを深めました。

当日早朝からは、後者のグループも合流し、東長崎教会から十五kmの道のりを会場まで巡礼し土砂降りの雨の中、靴がグシヨグシヨになりながらも歩きまわりました。

会場となったビックNスタジアムでは、さきほどまでの雨がウソのように、そして列福式を祝福するかのよう光が差し込み感動しました。

三万人を越える列席者となった厳肅な式典は、ワールド・ユース・デイ（世界青年大会）の感

覚とはまた違いますが、これほどの人がわずかな四時間の式典のために全国から集まれるのであれば、まだまだ日本のカトリック教会に出来ることがあるのではないか、そう考えさせられました。

私たちは普段から多くの力を神さまからもらっています。そしてそのほとんどに気づかないままにいるなあと改めて感じました。

式典の最中、司式をされた白柳枢機卿様が、毎年三万人の自殺者が出る日本社会に対して、「死ぬのではなく、生きて自分出来ることをなすべきだ。信仰のために証をして殉教した人たちは、粗末に自分の生を生きることを望んでいない」と言うようなことを説教でおっしゃっていました。

私たちにできる、キリストの証とは何なのか、「証できる信仰」を恐れずに大きなことではなくても普段の生活の小さな部分から実践できればと考える今日この頃です。



## 列福式に参加して

幼きイエスの聖テレジア  
西脇 有紀

列福式が長崎で行われる、そう聞いてすぐ『行って参列したい』と思い、早々と参列申し込みをした。これまで二五〇名近くの日本の殉教者が列聖・列福されているが、日本でその式が挙行されたことはない。しかし今回は日本での列福式である。この先、生きている間にこんなチャンスはもう巡ってこないかもしれない。長崎なら行くことと思えば行ける場所である。これを逃す訳にはいかない。考えるというよりは湧き出るような思いだった。呼ばれているという感覚に近い気もした。

私は仕事を休み、喜々として長崎に向かった。列福式の前日には夕方から夜にかけて長崎市内の四つの教会で前夜祭があり、私が行った浦上教会では五回ある祈りの集いのうち午後五時から集いは高松教区の溝部司教

様の司式による祈りであり、司教様によるお説教があった。溝部司教様のお話は列福される殉教者の一人であるジュリアン中浦についてであった。ジュリアン中浦は四人の天正遣欧使節の一人であるけれども、ローマへの旅でも華々しい活躍などは史料に見られず、残っているのは病気や失敗談など。しかし、ただひたすら神を信じ、神を求めて二十年以上の年月をかけてやっと司祭に叙階され、迫害の中信者たちを支え続けたジュリアンが最期を迎える刑場で『私はローマに行った中浦神父です』と言ったのはジュリアンが持っていた信仰の支えと誇りだったと思う。地味なイメージの多い彼だけでも、そこがとても好きだとおっしゃった。

この司教様のお話を聞いて、私は一八八名の殉教者についてさほどの予備知識もないまま列福式に臨もうとしていることに気がついた。わたしが事前に学んだことと言えば十月からミサの中で『列福をひかえ、ともに祈る七週間』を読んだくらいである。列福式その場にいたいという気持ちが強かったので、それでいいと思っていた。しかし、これでは列福される殉教者たちに失礼なのでは、という思いが募ったが、時すでに遅し。一晚では一八八名の信仰を顧みることなど無理とあきらめた。列福式の中でも白柳枢機卿様のお説教で殉教者についての話があり、せつかくこの機会を意味もわからず参加しているような思いがしてきた。そこで列福式のお土産として甥と姪にと買った子供向けの一八八名の殉教者の物語『恵みの風に帆をはって』という本を自分が先に読んで、あらためて殉教者たちの信仰の強さを知り敬服し、列福式に参列できたことを喜んでいく。

列福式は長時間のうえ天候も良くなかったが、少々寒い思いはしたもののあつという間の四時間であつた気がする。私は祭壇がほぼ正面に見えるスタンド席にいて式場全体を見渡せたが、参列者の中でも自分たちの教区から列福された殉教者がいる人たちは本当に誇らしげで心からこの列福を喜び、その準備をしてきたんだなあと思わされた。また長崎教区の信者の方々は準備・運営にたいへんな時間と労力を奉げてきたと思う。私の従兄弟の子ども（小学一年生と三年生）は聖歌隊の一員となつて前日まで練習に励み、教皇代理のサライバ・マルティンス枢機卿様と握手をしたと喜んで教会学校から帰ってきた。列福式当日も朝早くから教会に集合しシスターに連れられて式場に行き歌声を披露した。寒くても眠くても何の文句も言わず、それが当然のごとく列福式のための準備をし、参加をしていた。そういう姿を見て、やはり自分の準備不足を反省した。



四時間という短い時間ではあるけれども、列福式が執り行われている時間にその場所に身を置いて聞こえる聖歌隊の歌声、五〇〇名近い司祭団の入場や退場、たくさんの子ボリウムを手にした子どもたちの長い長い奉納行列、そして何より一八八名の殉教者が列福されることを喜ぶ大勢の信徒たちの思いを肌で感じる事ができたのはとても貴重でもとても素晴らしい経験であつたと思う。神に感謝

長崎での恵みの時

A Moment of Grace in Nagasaki

小川 セシール

Ogawa Cecile

先月、私は188日本殉教者列福式のための長崎巡礼グループに参加する機会をいただきました。11月23日、浦上司教座聖堂でのミサに参加するために出かけました。幸運にもミサの司式司祭が188殉教者の列福を宣言したジョゼ・サライバ・マルティンス枢機卿様だったのです。ミサ後、枢機卿様の手に接吻することは

私にとって大きな誉れであり、この行為はフィリピンの文化では敬意を表すこととなります。この場所から私たちはこの界隈の中にある様々な教会を訪問して過ごしました。

次の日の11月24日、188日本殉教者は列福されました。私にとってそれは恵みに満ちた瞬間でした。それはこの式での証人となれたからです。激しい雨の中、厳粛な様子でした。式の間、意義深い象徴的なことが私をとらえました。それは、激しい雨が降る中で祭壇上を旋回する鳥たちがいて、まるで式に参加したい様子でした。そして説教から聖体拝領のあたりまで、天気は突然晴れ上がりました。こうした事に他の解釈があるかもしれませんが。しかし私にとっては、「神がそこにいた」という信仰のメッセージを意味するものです。

Last month, I was given the opportunity to join the pilgrims group of Nagoya for the beatification ceremony of the 188 Japanese martyrs. On November 23, we went to the Urakami Cathedral to hear mass. Fortunately, the celebrant of the mass, Cardinal Jose \_\_\_\_, was the one who would beatify the 188 Japanese martyrs. It was a great privilege for me that after the mass I was able to kiss his hand, which is a Filipino culture meaning respect. From there, we spent the day visiting the different churches in the area.

On the following day, November 24, the 188 Japanese martyrs were beatified. For me, it was a grace-filled moment, because I was able to witness this ceremony. It was solemn despite the heavy rains. During the ceremony, there were significant symbols that caught my attention. There were birds circling the altar during the heavy downpour of the rain, as if they also wanted to be a part of the ceremony. And the weather suddenly cleared up from the homily until the communion. There may be other interpretations for these things, but for me, they signify a message of faith that God was there.

The homily of Cardinal Shirayanagi challenged me not to be afraid of my witnessing as a Catholic Christian. As the example given by the Japanese martyrs, I should also have the courage to practice my faith.

In my whole stay in Nagasaki, I've never felt that I was with strangers. This really inspired me and made me realize that "NO ONE IS A STRANGER IN GOD'S LOVE".

Despite of cold wind and pouring rain, I was one of the thousand people who gathered and took part in the joyful ceremony of "Beatification of 188 Japanese Martyrs" in Nagasaki baseball stadium last Nov 24th Monday morning.

The ceremony was led by Car. Jose Saraiva Martin, a representative of Pope Benedict XVI.

During the mass, newly beatified martyrs were introduced. Some died on the cross, others were drowned, burnt and beheaded. It's sorrowful! But, it shows their faithfulness in Christ by sacrificing their life into death.

For me, this big event gives me hope to keep my strong faith. The martyrs urged me to fight for everything in daily life without fear. That, I am not alone....God is always there! Thank you Lord for such a grace and privileged given to attend that pilgrimage with good health and strength.

長崎巡礼レポート

Nagasaki's Report

宮崎 ローズ

Miyazaki Rose

冷たい風と降りそそぐ雨にもかかわらず、11月24日月曜日朝、スタジアムでの188人の日本殉教者の喜びの列福式に集まり、式に参加した何万もの人々の内の一人でありました。式は教皇ベネディクト十六世の代理であるホセ・サライヴァ・マルティン枢機卿によって行われました。

ミサの間、新しく列福された殉教者たちが紹介されました。何人かは十字架刑で、他の人は水攻め、火あぶり、首切りで死んでいきました。それはとても辛いことです。しかし、キリストの内に死に至るまで命を捧げることで、彼らの忠実さを示しています。この大きな行事は私に、強い信仰を守り続ける希望を与えてくれました。殉教者たちは、怖がらずに日々の生活の中の全てと戦うよう私を駆り立てました。それは、私は独りではない、神さまはいつもそこにいてくださるということです。主よ、このような恵みと、良い健康や体力が伴った巡礼に参加できるという栄誉に与らせていただき感謝します。

わかもんウォークで5.8km歩いた  
名古屋教区の青年たち。左から2番  
目に水口忠君



雲仙教会の前で名古屋教区青年団

原城跡の天草四郎像前で



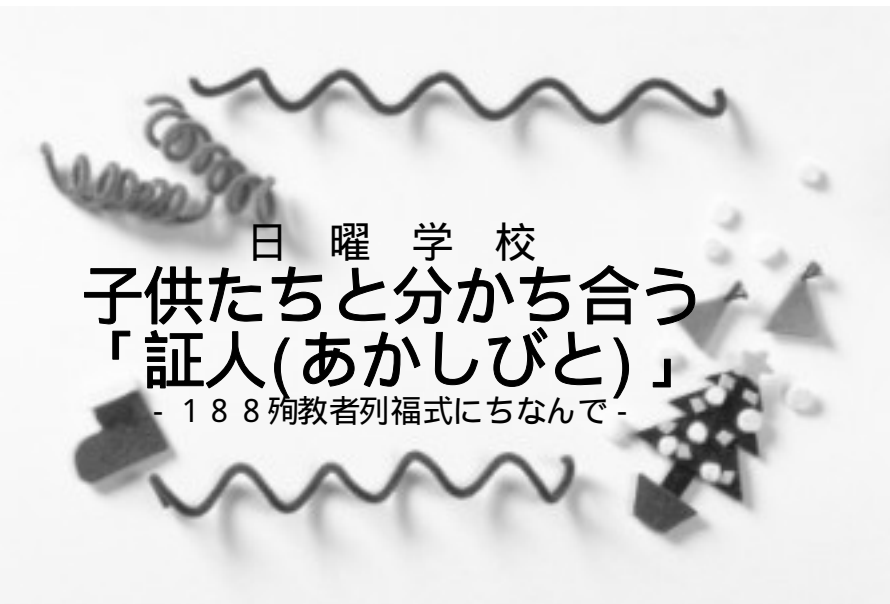
列福式会場でフィリピングループと野村司教様を囲んで

長崎駅で敦賀教会のジョイ神父様（写真右下）とも合流



# 列福式 アルバム





一八八殉教者列福式をうけて、日曜学校では米国寺見学を含め六回にわたるプログラムを行い、信仰の諸先輩方の生き様を学んできました。学んでいくうちに、当時の信仰共同体がいかに互いに励まし合って生きていたかということが分かってきました。「苦しんで死ぬ」というところにアクセントが置かれがちな「殉教者」は、実は「信仰を生き抜いた人」であり、多くの信徒は、神を中心とした生活の中で、よく祈り、よく働き、互いに励まし合いながら「パライソ」を待ち望んでいたそうです。約三五〇年たった今、彼らは「一人も無駄にされることなく」主の栄光に与っているということ、私たちに証明してくれます。この力強い「証人」を目の当たりにして、子供たちに「あなたにとって『あかし人』とはどんな人？」という課題で、子供たちに絵を描いてもらいました。



木川信款くん(迫害下の信仰者)



木川啓緒くん(いのちの木)



中尾優香ちゃん(おじいちゃん・おばあちゃんの家の祭壇に向かって祈る姉妹)



中尾美咲ちゃん(祭壇に向かって祈る姉妹)



八幡美也子ちゃん(なかよし)



森野孝之くん(栄国寺の見取り図)



宮地翼くん(潜伏キリシタンの持ち物  
- 十字の入った刀の柄 - と祈る人)



宮地海翔くん(潜伏キリシタンの持ち物  
と祈る人)



若林昴樹くん  
(あかし人とイエス様を重ねて)



福田学人くん(天国に昇る殉教者)

...このような難しいテーマに、ご両親の助けを借りながら絵に取り組んでくれた子供たち。厳しい迫害下にある殉教者の苦しい場面が多いですが、私たちは列福式の説教で「恐れるな」というメッセージで励まされ、さらにこれを後押しするように、主のご降誕で「いつもあなた方と共にいる」とメッセージが送られます。神を中心とした生き方は、独りでは生きられません。だから共に歩める信仰共同体があることに深く感謝しながら、主のご降誕の喜びを共に味わいたいと思います。(みこころの聖母会 Sr. 林 明恵)

ヨハネ・パウロ 世  
の思い出

マリア  
高木 やす子

今頃と思われるかも知れませ

んが、わたしは今、クレド（ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世の思い出というDVD）にハマっています。二〇〇五年四月四日、午後五時「ローマ教皇の亡骸が教皇庁からバジリカへと運ばれていきます」という場面から始まり「イエス・キリストは我々を天国へと導いてくださる扉なのです」とパウロ二世の言葉が続きます。

これは一時間の映像ですが、その間、教皇と親交の深かったテノール歌手アンドレア・ボチェリが歌う深く静かな宗教アリアが流れます。そして生前のさまざまな活動を映像で振り返ります。それを五〇インチの画面でボリウムを大きめにして聴くと本当に至福の時です。

幼い子供を肩車にしたお父さん、ベビーカーを引いたお母さん、

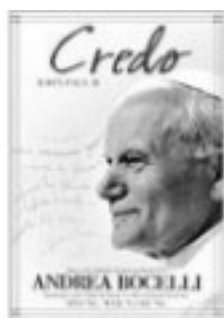
寝袋を肩にお別れにきた青年、自分の袖口で涙を拭きながら祈っている女の子、みんな悲しみの中でとても美しい顔をしています。が、一番素晴らしいのは幼い子供と接している教皇の笑顔です。深い祈りの姿が印象的です。カッチーニ、バッハ、グノーのアヴェマリアに続き、葬儀に入る前にシユウベルトの子守唄が唄われた時「ねむれ、ねむれ、母の胸に・・・」と心から唄いたくなります。この音楽がこんなに心に響くとは・・・

私たちは何時も「聖心の聖母への祈り」を祈ります。聖心の聖母よ、思い起こしてください、主があなたになされた偉大なことを。主は、あなたを母に選び、十字架の時も、そばにいて望まれました。主は、あなたを、ご自分の栄光にあずからせ、あなたの祈りを聴いておられます。私たちの賛美と感謝の祈りを、主に献げ、私たちの願いを主に取り成してください。み国が来ますように、あなたと同じように、御子の愛のうちに住まわせてください。

ラツツインガー枢機卿（現ベネディクト十六世）の言葉を紹介します。「われらが亡き教皇は慈悲の光を聖母の中に見たと言います。幼いときに母親を亡くした彼は聖母を深く愛していました。磔になったイエスの「見なさい、あなたの母です」という主の言葉を聞いたのです。そして使徒と同じように、イエスの母を心から受け入れたのです。彼は聖母によって忠誠の心を育まれたのです。聖なる母の子、イエスキリストよ永遠なれ」

私たちのジュール・シュヴァリエ神父様も、お母さんをとても愛しておられました。そして私

高木さんの寄稿にあったDVDを紹介！



『クレド～ローマ教皇ヨハネ・パウロ 世の思い出』  
/ アンドレア・ボチェリ

2005年4月に84歳で世界中の信徒から惜しまれて亡くなったヨハネ・パウロ 世の宗教活動をアンドレア・ボチェリの歌う宗教曲とともに贈るドキュメンタリー。1978年の教皇選出に始まり、2005年に亡くなるまでの模様が当時の映像によって綴られています。また、ヨハネ・パウロII世は全世界を旅行し、「空飛ぶ教皇（空飛ぶ聖座）」といわれるほどで当時の映像の一部も含まれています。

世界的なテノール歌手アンドレア・ボチェリは、ヨハネ・パウロ 世との関係が深く、ボーナス映像として、2000年にトル・ベルガータで行われた彼のライブよりジョン・ミュンフン指揮サンタ・チェチーリア国立アカデミー管弦楽団によるシユウベルトの「アヴェ・マリア」が収録されています。

(Tower Records Japanホームページより抜粋)

# 不審 発見

## 「イエス様のいない十字架」

**カ**トリックの教会は磔刑の十字架像ですが、プロテ

スタントの教会はイエス様が架かっていない十字架となっています。マリア像がないのは分かりますが、どうしてイエス様もおられないのでしょうか、これが今回の不思議です。

普通、プロテスタントでは、

偶像崇拜は禁じられており、そもそも十字架はキリストが復活された栄光のしるしであると説明されているようです。神の十戒で、「わたしのほかに神があつてはならない」「あなたはいかなる像も造ってはならない」と

敬をしますし、聖マリアも崇敬

します。しかし、注意したいのは、崇拜ではなく、崇敬ということ。それは、聖画像の元となつているものを敬うことであり、絵や像を拝むことではありません。



ありますから、当然、偶像崇拜は禁じられております。しかし、人となられたみことばの神秘に基づき、聖画像の崇敬を、七八七年にニケアで開かれた公会議で、正当化しております。ですから、私たちは十字架の崇

敬をしますし、聖マリアも崇敬します。しかし、注意したいのは、崇拜ではなく、崇敬ということ。それは、聖画像の元となつているものを敬うことであり、絵や像を拝むことではありません。

独の磔刑像として、画ではなく彫刻として表現されていきます。画家や彫刻家にしてみれば、磔刑はキリストの生涯の、単なる一場面ではなく、キリスト教の教義そのものですので、写実的に事件として描くには、あまりにも内面的な出来事だということなのでしょう。十字架像は、抽象的な単純化された構図のものが多いのは、このあたりに原因があると思われます。

十字架上の苦難の僕、受難のイエスよりも、死に打ち勝った復活のイエス様、勝利の王を見るプロテスタント教会の十字架に対する考えは、一八八人の福者の殉教を深く味わわせてくれました。ややもすれば、むごたらしい死に目がいきますが、処刑場を取り巻く多くの人たちの眼差しがあつたのは何故でしょうか。列福式当日の冷たい小雨、後半の暖かい日差しは、受難を通しての栄光を思わせてくれました。

(文責:後藤明憲)

# 教会のこの人

## 『花を咲かせ、実を实らせる』 フランシスコ 片岡義松さん



本当に花が好きなんだ。しかも奥ゆかしく、寡黙で、笑顔が素敵な人なのである。物を言わぬ植物を愛する人だけに、ただ注意深く、花を観察し、忍耐強く、適切な処置を施していく、ただそれだけのことをしているだけだと、多くを語って貰えなかった。

ご存知のように、この教会は燃糸工場の跡地だけに、少し掘ればコンクリートの破片が出てくる土地を、根気良く整地し、花壇を作っていた。建築土木の専門家らしく、土壌の改造には一番力を入れられたようだ。生い茂る木の枝打ち、雑草抜き、種まき、球根植えのプラン、季節ごとに、綺麗な花を咲かせるには、根気のいる地道な作業が必要なのだ。最近では、同じ花を大量に植える押し付けがましい花壇が多いが、色々な色があって美しい紅葉と同じように、庭の美しさも、また同じである。見る側にも、夫々の花の個性を愉しむ気持ちの余裕が欲しい。神は創造された全てのものを良しとされた。イエスも差別を廃し、全ての人を愛された。声高な押し付けがましい主張ではなく、物事を注意深く聴くという、沈黙が必要な時代だと、片岡さんに教えられた。

そうか、片岡三兄弟を育てられたお父さんなのだと、ここでようやく納得できた思いがした。

花を咲かせ、実を实らせるこうした作業は、私たちが、ぶどうの木に繋がっていることを実感させる良い方法であるから、日曜学校の子供たち専用の花壇も作りたいと、言っておられたのが印象的であった。

(文責：後藤明憲)



## はじめまして

### ゴドジャリさんご夫妻

はじめまして。私はインドネシア・ジャカルタ出身のリチャード(Richard)と申します。洗礼名は、「us」を付け足した“Richardus”です。両親がカトリック信者のため、生後一ヶ月で洗礼を受けました。高校生の頃は、聖歌隊に属し、ミサで歌を歌っていました。

2003年に、日本人の妻：静(しずか)と結婚し、12月の雪の降る日に来日しました。この時は、妻の実家のある岐阜県各務原市に住んでいました。仕事の都合で、日曜日にお休みを取ることが難しいため、平日のお昼にミサを行っている“みこころセンター”へ行っていました。そちらで、シスター・アシアを紹介され、城北橋教会のことを知りました。なかなか行く機会がなかったのですが、1年半前に、名古屋市北区に引越し、ようやく、訪れる事ができました。

初めて城北橋教会を訪れた時、同じインドネシア出身のプリヨ神父様とシスター・リタに会うことができ、いろいろお話をしました。そして、私は転入届を出し、妻はプリヨ神父様と入信のお勉強を始めました。

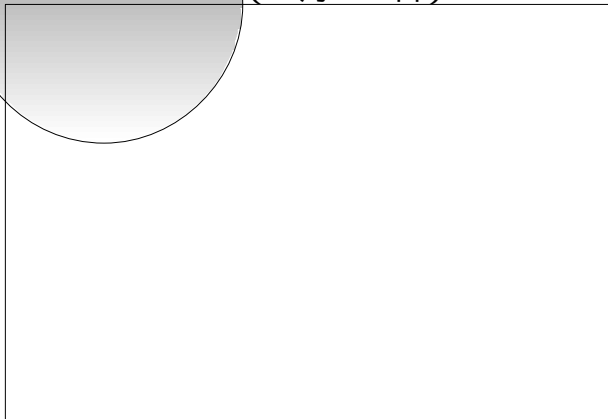
最近は、日曜日にお休みを取れる週もあり、神に感謝しております。また、11月4日に、娘：花蓮(かれん)が生まれました。無事に生まれた事も、神様のおかげだと思います。

今年は3人で賑やかなクリスマスを迎えたいと思います。

追記 奥様の静さんと赤ちゃんの花蓮ちゃんは12月25日に城北橋教会で洗礼を受けられます。

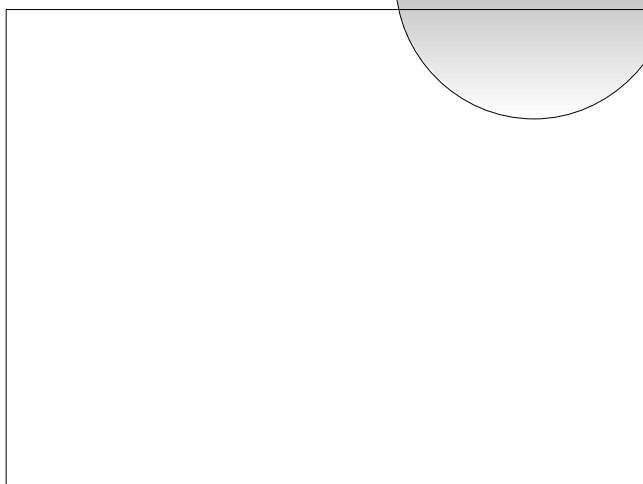


# 初聖体 (5月25日)



# 写真で振り返る 城北橋教会 行事報告

# 堅信式 (10月5日)



# ヘルマス神父様 初ミサ (9月7日)



# マックバザー (10月12日)



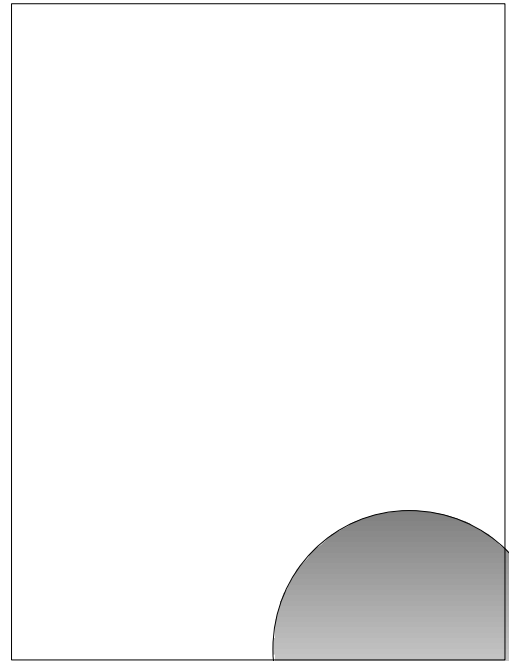
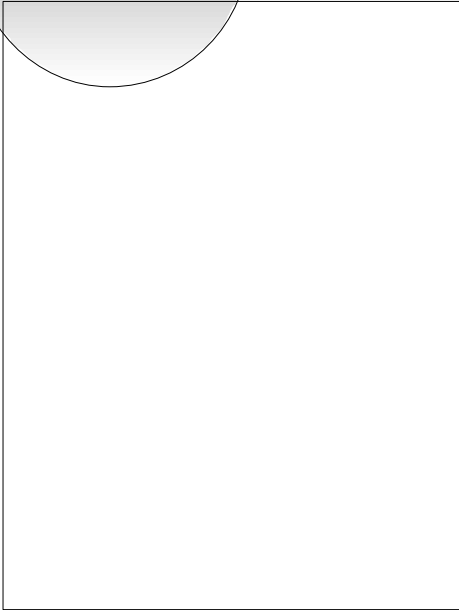
~堅信を受けられた方々~  
おめでとうございます!

- |            |        |
|------------|--------|
| ペトロ        | 山田 聖治  |
| パウロ        | 中山 祐太  |
| マリア        | 大竹 里奈  |
| ドミニック      | 小川 純平  |
| マリア・セシリア   | 小川 美智子 |
| アグネス       | 古澤 知裕  |
| アンジェラ      | 恒川 安奈  |
| アジのフランス    | 吉田 兼磨  |
| ペルデッタ・マリア  | 平 富美恵  |
| テレジア       | 田村 由美子 |
| ルイズ・ド・マリア  | 八幡 京子  |
| マリア        | 間宮 徳子  |
| マリア・イザベア   | 福田 朱美  |
| マグダラのマリア   | 菊地 由紀子 |
| マグダレ・ソフィ   | 山本 陽美  |
| マリア・マリア・コル | 清水 綾子  |

おかえりなさい!

## サニ神父様歓迎会

(11月30日)

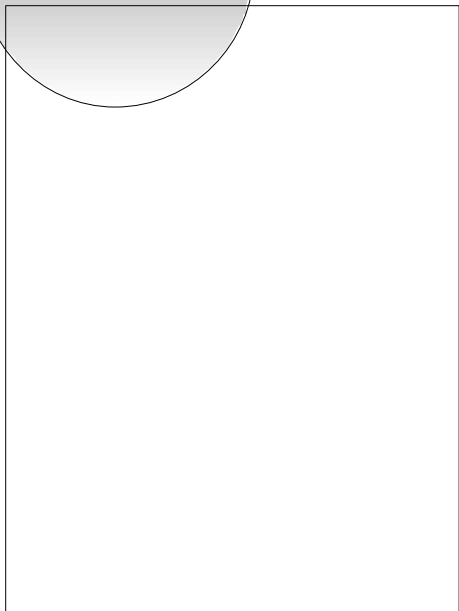


七五三 (11月9日)

## 黙想会

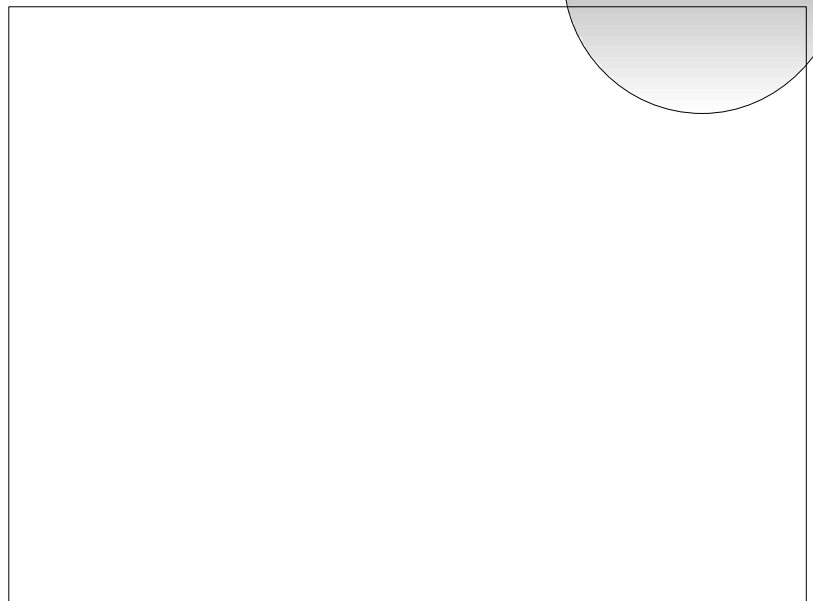
(12月14日)

指導司祭：アイダル神父様 (イエズス会)



## 日曜学校クリスマス会

(12月20日)



# 信者動向

【転出】おげんきで！

十月三十一日

五反城教会へ

カタリナ 藤松 香理

【受洗】おめでとう！

九月十四日

マリア 宮地 沙彩

十一月九日

聖ヨハネ 浜 隆輔



【結婚】お幸せに！

九月六日

フランシスコ・ソラノ 笹野

近藤

豊 異奈



十月十一日

エリザベット

三品

貴嗣

水口

育江

十一月十五日

フランシスコ

柴田

祥史

小木曾

宏美



# 行事予定

一月一日(木)

神の母聖マリア

十時より

新成人祝別

一月十八日(日)

城北橋教会

新年の集い・新成人のお祝い

教会委員会

一月二十五日(日)

パウロの回心 ミサ

十時より

二月十五日(日)

教会委員会

二月二十五日(水)

灰の水曜日 ミサ

七時より

三月十五日(日)

教会委員会

四月五日(日)

受難の主日(枝の主日)

四月九日(木)

聖木曜日ミサ

十九時より

四月十日(金)

聖金曜日ミサ

十九時より

四月十一日(土)

復活徹夜祭ミサ

十九時より

四月十二日(日)

復活祭

九時半より

# 編集後記

今年も残すところ、早いものであと一週間となりました。今年を振り返って、みなさんにとって今年一年はどのような年だったでしょうか。

先週、毎年恒例の今年の世相を現す漢字が紹介され、公募の中から第一位に「変」が選ばれました。政治の「変」、経済の「変」、生活の「変」、気候の「変」。政治、経済をはじめ良くも悪くも変化の多かった一年でした。

日本のカトリック教会では、今回みこころの特集にも取り上げましたが、一八八人の殉教者の列福式が日本で執り行われる大きな行事もありました。式典の中で、白柳枢機卿様は「神が、そして殉教者が私たちに呼びかけている、怖れるな！」と、日本のカトリック信者たちを激励しました。殉教者からたちから頂いた恵みに応え、信じたことを伝え、伝えたことを実行し、世の中も自分たちも新しく「変」わっていき希望のある社会にしていきたいと振り返っています。

来年も皆さんにとって恵み豊かな一年となりますようお祈りしています。

(片岡)